

フェリス

二〇二四年度

国

語

《注意》

- 一、問題は、一から二十六ページにあります。始まりのチャイムが鳴ったら必ず確認してください。
- 二、問題を解く前に、解答用紙に受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- 三、答は、すべて解答用紙に書いてください。句読点や記号などは字数にふくめます。
- 四、解答用紙の一行のわく内には二行以上書かないようにしてください。

「一」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

ひさし少年は、馬の絵をかいている。

三頭の軍馬が、並んでかけて行く姿を真横からかいている。

日曜日なのに、父親は工場からむかえの人が来て、つい先程、朝食が終わると早々に出かけて行った。出かける前に、これが今日の分だよ、と言って、四つ切の画用紙を一枚ひさしにわたした。

勉強部屋は、日々草がさく裏庭に面しているので、母親と住みこみの小母さんが洗たく物を干しながら話しているのがみんな聞こえてくる。この家の物干し場は、ひさしの部屋からは見えないところにあるのだが、今日は、そこが客ぶとんや敷布類でふさがってしまったため、母親と小母さんは、裏庭の櫓の木を利用してつなを張り、客用のゆかたを干している。

〔将校さん達、もう輸送船に乗ったでしょうか。〕

小母さんが言う。

「乗ってもまだ、港の内じゃないかしら。そう簡単には出て行けないでしょう。」

母親が言う。

「この暑い時に、海の上でじかに照りつけられて、いくら若いといっても船よいする人もいるでしょうに。」

「見るものといえは毎日空と海ばかり。これから親の待つ郷里へ帰るわけではないし、物見遊山に行くわけでもない。それを思えば、こうして船に乗る前の何日か宿をさせられるのも、いやだとは言えなくなるのよね。」

「でも、一と晩、二た晩はまだいいとして、いくら食事の世話はいいさいらないといっても一週間というのは長過ぎます。」

「時勢だ、お上のたのみだと言われても、表座敷を何日も使われるのはねえ。ただ、あの人達の行く先を考える

と、床の間のある部屋にねむらせてあげたいと思うのは人情でしょう。わたし達が少しのあいだがまんしていればすむことだから。まあ、お天気ばかりは今夜のことも分からないし、思いがけず乗船待ちになる事情だって起こるかもしれない。」

「うちは兵隊さんのお宿は出来ませんって、断りなさんお宅はないんでしょうか。」

「どうなのかしら。病人でもあれば、いくら割り当てだと言われても困るでしょう。」

小母さんは、かわいたゆかたのえりを両てのひらにはさんで、ばちばちたくようにしながらしわをのばしている。そして、ちょっと不服そうな声で言う。

問二

「隣組の組長さんが、お宅は部屋数が多いんだからと言って、宿を引き受けるのが当たり前のような顔して割り当てに見えるでしょ。わたしや、どうもあれが気に入らない。たくさん割り当てられて喜ぶとも思っているの。かって言ってやりたいですよ。」

「組長さんしてみれば、言いたくて言っているわけではないでしょう。」

「そんなことは分かっています。でも、この町内で大勢引き受ければ、けっきょくは自分の顔がよくなるじゃありませんか。」

「旅館がいっぱいになって、港に近い町家に宿をたのんでくるのは仕方がないと思うけれど……」

「旦那さまも奥さまも、少しお氣がよ過ぎます。いつだって、はい、はい。わたしやそれもじれったい。船を待っている人の身になれば、そりゃわたしだって奥さまと同じです。わたしが言いたいのは、組長さんのことですよ。時にはもう少し困らせたほうがいい。」

ひさはこの一週間、いつもは土蔵へ行く通路をまかねている仏間で、両親の間にはさまってねて、それはそれでけっこうたのしかった。部屋を変えてねると、両親と旅行している時のような気がした。あと二年もすれば、

ひさしも中学受験である。

隣組の組長からの達しによると、乗船待ちの出征軍人の宿を割り当てられた場合、食事、入浴の世話はいっさいする必要なし、寢室と夜具の提供だけでよいということであった。隣組の人たちは、この宿のことを「兵隊宿」とよんで引き受けた。

ひさしの家では、これまでに何度も何度かこの宿を引き受けていて、一日だけのこともあれば、今度のように一週間も続く場合もあり、たまに兵隊がいっしょのこともあったが、大方は将校で、いちばん多い時は五人だった。

ひさしの家には、簡単な庭そうじや、家のまわりのちょっとした片付けには、古くから出入りしている老人がいるが、行儀見習いということであって来た若い女は、親の看病に帰ったままなので、住みこみの小母さんはかなりいそがしかった。

小母さんは、兵隊宿をすると、洗たく物が増えるのと、家の中で軍靴のにおいがするのをいやがった。夏は、洗たく物のかわきにはよかったが、玄関の三和土に長ぐつが五足も並んでいると、たしかに側を通るだけできついにおいがした。

戸別に人数の割り当てをする時、組長がどういう基準でしているのかはひさしの母親にはよく分からなかった。しかし、部屋数だけで言うなら、当然宿を引き受けてよいはずなのに、割り当てられていない家もあった。また、ひさしの母親は、組長から、今回は、お宅へは割り当ての人数を少なくしてあげました、というような言い方をされたこともあったが、別にそれを感謝したこともなかった。

ひさしの家では、組長からの達し通り、食事、入浴の世話はいっさいしなかった。ただひさしの母親の性格から、お茶とお菓子だけは厚くもてなした。そうしないではいられなかった。だまってお茶しか飲まない将校がい

た。自分達は、ごめいわくをかけてはいけないことになっていきますから、と断って、菓子に手をつけない将校もいた。すすめられるまま、うれしそうに菓子を口にし、お茶のおかわりをする将校もいた。もてなしに対するどのような対応を見ても、見ているうちに胸をふさがれそうになるのがひさしの母親だった。

兵隊宿の割り当てが始まってまだ間もないころ、ひさしの母親は、家で草餅もちをつくって出したことがある。この時は将校だけでなく、兵隊がいっしょだった。兵隊宿をすることになっても、ひさしにはそのための用が増えるわけではなかったから、この時もひさしはけっこうたのしかった。

ひさしの家では、ひさしが物心ついてからというもの、正月餅はいつも工場の人を手伝いに来て、家でつく習慣くわんになっていた。裏庭にれんがをついてつくったかまどがある。ここでせいろうに入れたもち米を蒸して臼うすにあ

けると、向かい合って待ち構えていた威勢いせいのいい男が、冬空の下で、かけ声もろとも、交まじりに杵きねをふり始める。

臼の中から立ちのぼる湯気が、男たちの顔をつつむ。手水は、小母さんの役だった。〔注6〕

ひさしは、母親といっしょに暮れの風にふかれながら、かまどにたきぎを入れてけむりにむせたり、蒸し上がったもち米を、神だなや仏だんに供えに走ったりした。熱いもち米をしゃもじにはんのひとすくい茶わんによそってもらって食べたり、工場の人達ともなれない話をしたりしてこの日はいそがしく、気持よくつかれた。男達は、おきよめの酒にいいきげんになって、酒くさい息をはきながら杵きねをふった。〔注7〕

ひさしの勉強部屋と、部屋に続く広縁えんには、この日ばかりは上敷うわがしかれ、ここが急いそごしらえの丸餅製造場になった。ひさしの母親と手伝いの若い女は、つきたての餅を木箱にとると、す早く手と餅に粉をふり、片手でしぼり出すようにしながら、一方の手でどんどん千切り取って小さな丸餅をつくってゆく。

ひさしは、いくら母親に教わっても、千切り方も丸め方もいいねい過ぎるので、途と中で餅が冷えてしまい、あとは、ねん土細工に四苦八苦するような工合ぐあいであった。指先やてのひらにからんだ餅がそのまま固くなってしまう

うと、熱いお湯にでもひたさなければ、容易に元の手にはもどらない。

問五

けれどもこの餅つきも、人手が思うにまかせぬようになり、父親もまた世の中を気にして万事自しゆく気味になり始めてから、簡素化された。父親は、出入りの男にたのんで、臼は石臼、杵は一本、それも手でふるのではなく、足でふむと杵が上がり、足を外すとひとりでに杵が落ちて臼の中のものをつくという装置を軒下につくした。これなら男手はなくても餅つきが出来る。

兵隊宿の割り当てが来るようになったころは、もうこの石臼に変わっていた。小母さんが杵をふみ、母親が手水をさし、ひさしがそのまわりをちょろちょろして草餅が出来上がった。本を読みながらでもお餅をつけるから、わたしや女二宮金次郎よ、と小母さんは得意気だった。よもぎは新しかったので、香りの高い草餅になった。

しかしこの時、兵隊に草餅を食べさせることは出来なかった。将校が手をつけなかったので、兵隊はそれにならうはなかった。

「お心づかいに感謝します。」

兵隊は、玄関で直立不動の姿勢をとり、ひさしの母親に挙手の礼をすると、あわただしく将校のあとを追った。

「あのばか将校が。」

小母さんは流しで洗いものをしながらひとりでおこっていた。

「折角なのに、なぜ部下に食べさせないのか。部下の心もくめずにいい指揮ができるわけがない。」

小母さんはののしり続けた。

ひさしの母親も、小母さんの言うのが当たっているような気がした。あの将校は、部下の心どころかわたし達の気持さえ、と思いかけてまた考え直した。いやあの将校もつらくなかったはずはない。部下にあたえるほうがどんなに気持が楽だったろう、そう思うと、部下だけでなく、将校も

問六

今朝ひさしの家をけ発はって行いった将校達は、ひさしの母親には、いずれもまだ二十代の若さに見えた。彼らは滞た在中、毎朝早く、馬丁が馬をひいてむかえに来了。三人の将校は、それぞれ馬に乗って出かけて行き、ひづめの音とともに帰って来た。隣組の組長の話では、あまり遠くない所に、軍の駐屯所ちゆうとんらしいものがあるということだった。

ひさしは毎朝、表に出て騎馬の将校を見送った。夏休みがさいわいした。ひさしの父親は、いつの時でも、泊りの軍人には会わなかった。世話はおっぱら母親と小母さんの仕事で、将校達は一体に口数が少なかったが、それでも言葉をかわすのはひさしがいちばん多かった。

ひさしの目には、それぞれの将校の乗る馬はいつも決まっていた。いちばん背の高い将校の馬が姿がもっともよく、その次に姿のよい馬にはふとった将校が乗った。背の低い、そしてやせた将校には、それらしい馬のあてがわれているのがひさしにはおかしかったが、毛並のいちばん美しいのはこの馬だったので、よかったと思った。背の高い将校が、皮ぶくろに入っている腰の日本刀を、ぬいて見せようかと言ったことがある。しかしひさしは首をふった。刀よりも馬のほうに興味があった。

馬は、からだの大きさの割には不釣合ふてあなほど目がいいとはよく人が言うけれど、どうしてあんなにやさしい目をしているのだろうか。ひさしは思った。馬の目を見てみると、それが馬の目だということをよく忘れた。それに、〔注10〕前肢後肢の動きは何度ながめてもおどろくばかりで、その動きの複雑さは、不思議をこえて、そういう生きものをつくった目に見えない何かをひさしにこわいと思わせた。すばらしいと思わせた。

ひさしはよく、周囲にだれもないのを確かめてからたたみの上に四つんばいになり、馬と同じように歩いてみようとするのだった。けれども、何秒も数えないうちにあっけなくひっくり返ってしまう。ひっくり返ってもひっくり返ってもくり返してみる。もしも今の自分をだれかが見ていたらと思うと何となくきまりが悪くなっ

て、腹を見せてもがいている金ぶんぶんのように、ひっくり返ったまま手足をばたつかせてひとりで笑った。

毎日、三頭の馬を間近に見られることが、ひさしをいきいきとさせた。ひさしは、学校で自由画といういつでも馬の絵をかいいた。図画の先生は、ひさし君の馬は、クラスの他のだれがかく馬ともちがって生きている、そう言ってよくほめた。新聞社主さいの小学校の図画の展覧会に、本人にはだまってひさしの馬を出品して、特賞をとらせたこともある。ひさしは、うれしくはなかったが、賞に対しての格別のしゅう着はなかった。賞より馬、だった。

宿題の絵をひさしにたのむ友達があった。先生に見破られると、君も困るだろう、だから、君が、これで半分の出来上がりだと思ふところまでかいてほしい。あとは自分がかく。友達はそう言った。ひさしはこの友達に何度馬をかいてやったかしのれない。しかし、友達にかいてやっているという気持には一度もならなかった。あの馬の目の深いやさしさと、四本の肢あしのおどろくべき動きを、何とかあらわしたい一念であった。かけばかくほど、実際の馬の目はいよいよやさしく、四本の肢の動きはいよいよすばらしいものに思われ、かくことで自分がそれに近づいているような気もするのに、逆に遠ざかっていくような感じもあって、かく度問七に初めてのおどろきとよるこびを味わった。不安もまたその都度、新しかった。

父親が毎日一枚しか四つ切の画用紙をあたえないのにはそれなりの理由がある。父親はひさしに、用紙をむだづかいしないようにと言った。けれども父親は、ひさしが宿題とは関係なく、毎日好きでかく絵に熱中しはじめると、時を忘れて打ちこむのを内心ではたのしく思いながらも、健康のことも気になるので、一枚の絵ならどんなに時間をかけてもという見通しから、むだづかいせぬよう、一枚だけという約束をひさしと取りかわした。

また、いつでも、せめてもう一枚用紙があればという気持を残させることが、ひさしの絵のためにはかえってよいだろうという考えもこの父親にはあった。学用品は全部母親がととのえてくれるのに、この画用紙だけは父

親の管かつだった。学校とは関係がないからだろうとひさしは思った。(中略)

三日前の夜のことである。

馬で帰って来た将校達は、いったん座敷にくつろぐと、背の高い将校が代表格になって、ひさしの母親にこう申し出た。

「長い間、ごやっかいをおかけして申し訳ありません。自分達の出発も、あと二、三日後にせまりました。ついでは、出発前に、ひさし君を連れて、神社参拝をしてきたいと思います。まちがいのないよう、責任をもちますから、明日一日、ひさし君を自分達に預けて下さい。」

その神社というのは、ひさしが低学年のころ、学校の遠足でいく度も行っている神社で、春は境だいの桜に、別の土地からも大勢の人が集まった。近くには川もある。ひさしの母親は、

「ありがとうございます。本人はきつとよろこびますでしょうが、主人がもどきましたら相談しまして、改めてご返事させていただきます。」

と言って引きさがった。

問八

ひさしに、どう？ とさぐると、一日中馬といられると思って、行く、行く、とはしゃいだが、たまらなくなつたひさしが直接将校達に、

「明日も、馬で行くんでしょう？」

とたずねると、背の高い将校が、

「明日は電車だよ。」

と答えたのにはひさしもがっかりした。

ただ、子供心にも、将校達がこの町を出発してからの運命というものをばく然とながら思わずにはいられない

ので、自分が断るのは気の毒だという気持ちも起こった。しかし半分は、ぼくを連れ出すなんてめいわくだなあ、という気持ちだった。あの人は、この土地の人ではないからあの神社がめずらしいのだろう。桜といっても、今は葉っぱばかり。用心しないと枝や葉から毛虫が落ちてくる。でも、やっぱり行こう。決めた。お父さんが行っているというなら、ぼくが案内役だ。

そのあくる朝、冷たい麦茶を入れた水とうを母親から受け取ったひさしが、将校達といっしょに家を出たのは、九時過ぎだった。

「どうぞよろしくお願いいたします。」

母親は腰を深く曲げて将校にたのんだ。

電車の中でも、道を歩いていても、彼らがほとんど口をきかないことがひさしにはありがたかった。ひさしは、学校の帰りに、買い物から帰って来る小母さんと出会ったりすると、気が重くなった。小母さんは、

「今日はどうでした？ お弁当はみんなあがりましたか？ 宿題は多いんですか？」

とか、

「夕方から工場の人が見えるんだそうですよ。おふろは、食事の前にします？ それとも後にします？」

などと言いながら、ひさしにしきりに返事を求めてくる。人中ひとなかで家の者に声をかけられるのは何となくはずかしい。また、そればかりでなく、ひさしはいつも、話しか歩くか、どっちかにしてほしいと思っていた。若いほうの手伝いの女に対しても、母親に対しても同じように思っていた。

将校達は、別に急いで歩いているふうではなかったが、歩はばが広いので、ひさしはどうしても急ぎ足になった。背の高さに関係なく三人が歩調をそろえているので、ひさしは、訓練というのはすごいものだと感じる。途中、兵隊と出会うと、兵隊のほうは一樣に歩調をとって、将校達に敬礼を送った。白手ぶくろが、きびきびし

た動きで挙手の礼を返す。ひさしは、ついて歩くだけで上気した。

参道に入るところで川のながめがひらけた。

川に、馬はいなかった。

ひさしは、

「練兵場で演習を終わった騎兵隊の馬が、よくこの川に入って来るんだけど、早いから、今日はまだ、いない。」と、言い訳をするような表情で言った。日も暮れ近くなって、一列に並んだ騎馬の兵士が、たづなをあやつりながら土手のしゃ面を静かに下って川の中に馬を進め、だいたい色にかがやいて流れる水の面おもてに、馬と一体になった自分達のかげをゆらめかせて小休止をとっているのは、ひさしにはいく度見ても見あきないがめだった。人馬の動きの止まったしゅん間、それがみごとな埴輪はにの列に見えることもあった。

四人は、馬のいない川のほとりでしばらく休んだ。

ひさしは、この近くの練兵場へは、友達とよく模型飛行機を飛ばしに来るのだと言い、練習を終わった騎兵隊の馬は、いつもどのあたりから、どのようにしてこの川のほとりに出てくるのかを細かに説明した。

「ひさし君は、よほど馬が好きなんだなあ。馬はかしこいからね。」

と、背の高い将校が言った。

「どれくらいかしこい？」

とひさしが聞いた。

「時によっては人間よりも。」

とふとった将校が答えた。

やせた将校は、ただ静かに笑っていた。それからしばらくたって、

「ものが言えなくても、からだでもものを言うし、人の心ははっきり読む。」

とひとりごとのように言った。

神社の境だいは、葉桜のさかりであった。

問十

ひさしは、ここではよく、外出を許可された陸軍病院の傷病兵が、白衣に軍靴のいでたちで、面会に来た家族らしい人たちとベンチに腰かけているのを見かけるが、午前中とあって、ここでもまだそれらしい人の姿は見られなかった。ひさしは、そのことにむしろほっとした。ここに来るまでは予想もしなかった安どだった。

三人の将校は、軍帽をとると、長い間本殿に向かつて頭を垂れていた。ひさしはその後ろから、見習って同じように頭を垂れていた。神社の裏手には、戦死者の墓地がある。ひさしは、将校達がその墓地に気づかないうちに早くこの境だいから連れ出さなければとあせっていた。参詣人はまばらであった。

陽にやけた顔でひさしが帰って来たのは、もう夕方だった。わきに、軍馬の画集のようなものをかかえている。背の高い将校は母親に、

「ありがとうございます。責任もって、ひさし君をおわたしいたします。」
と言った。

ひさしは、母親からその日一日のことをたずねられても、あまりくわしいことは言わなかった。神社へ行ったあと郊外電車に乗ったということ。町中へ帰って来て食事をしてから、町でいちばん大きな本屋に入り、自分が買ってほしいとせがんだわけではないのにあの人達はこの画集を買ってくれた、その程度のことしか話さなかった。

問十一

ひさしは、将校達と、とりたてて言うほどの話をしたわけではないのに、三人に対する自分の気持が、出かけて行く時とははっきりちがっていることに気づいていた。

めいわくだなあ、という思いはいつのまにか消えていた。それで、母親に対する報告も、何となくはずまないのだった。

「行ってよかった？」

と母親に聞かれてうなずきはしたが、からだ全体でうなずいているわけでもなかった。

今朝、将校達が引き上げて行ってから、ひさしは勉強部屋に入って夢中で三頭の馬をかき続けた。じっとして
問十二
いる馬は、今朝はかきたくなかった。毎朝、三人をむかえに來た三頭の軍馬を、思いきり走らせたかった。走らせずにはいられなかった。たてがみだけでなく、しっぽの先まで風になびかせた。

一と月ばかりたって、ひさしの父親あてに、三人の将校の連名で封書ふうしやうが届いた。一枚の写真と、簡単な文面の手紙で、そこには、滞在中の世話に対する礼が述べられ、自分達は元気で軍務についていること、ご一家のご多幸をいのるという主旨しのことがむだなく書かれていた。

写真は、神社の葉桜を背景にとったもので、真ん中に立っているひさしの後ろから、背の高い将校ががみこむようにしてひさしの両かたに手をかけ、ふとった将校は、軍刀の柄つかの上に白手ぶくろを重ねてひさしの右に、やせた将校はひさしの左に立って、なぜかこの人だけ、とんでもない方向に顔をあお向けている。

封とうの裏書きに、三人の居場所は明記されていない。部隊名だけが記され、その気付つけとなっていて、表には
注十二
「検閲済」のスタンプがおしてある。ひさしは、三人の将校が、家族の中で自分だけにしてくれた別れの意味を

考えようとしながら、にわかにわき出してきたとりとめのないかなしみの中で、自分がこれまで知らなかった新たな感情の世界に、いま、確かに一步入ったということを知らされた。父親にも母親にも言えないまま、じっとその思いをかみしめていた。

〈注1〉軍隊で上の位の人

〈注2〉土・石灰・にがりなどを混ぜてつき固めて仕上げた土間のこと。玄関の土足で入る部分

〈注3〉釜かまの上にのせて、もち米やまんじゅうなどを蒸す道具

〈注4〉穀物や餅をつくときに使う木や石をえぐって作った器

〈注5〉臼に入れた穀物や餅をつく木製の道具

〈注6〉餅をつくとき、手につけた水で臼の中の餅をしめらすこと

〈注7〉たたみやゆかの上に敷くもの

〈注8〉馬の世話をする職業の人

〈注9〉軍隊がとどまっている場所

〈注10〉四本の足を持つ動物の前足と後ろ足

〈注11〉住所ではなく、立ち寄り先などであるという断り書き

〈注12〉そのままではいかどうか調べることに。特に、国家機関が郵便物や出版物などの表現内容を調べて取りしめること

問一 後の問に答えなさい。

① 「ひさし」は何年生くらいですか。

② 「三人の将校」が「ひさし」の家に泊まった季節はいつですか。

問二 — 部「そして、ちょっと不服そうな声で言う」とありますが、「小母さん」はどのようなことに不服

があるのですか。あてはまるものに○、そうでないものには×を書きなさい。

1 宿を引き受けるのは自分たちだが、利益は隣組の組長のものになってしまうこと

2 食事・入浴・洗たくなど兵隊の生活の全てを自分ひとりで世話しなければならないこと

3 宿に泊まる兵隊たちが表座敷を何日にもわたってわが物顔で占領せんすること

4 ひさしの父母が宿の割り当てに文句も言わず、隣組の組長の言いなりになっていること

5 隣組の組長が、引き受けて当然だという態度で無遠りよに宿を割り当てること

6 いくら天気都合とはいえ、宿を引き受ける期間を隣組の組長が勝手に延長すること

問三 自分の家が「兵隊宿」になっている間、「ひさし」はどのような気持でしたか。十字以内でぬき出しなさい。

問四 — 部「ただひさしの母親の性格から、お茶とお菓子だけは厚くもてなした。そうしないではいられな

かった」とありますが、このときの「ひさしの母親」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 いくら短期間だからといって宿だけ貸すというのは物おしみをしているようでいやなので、禁止されて

いないはん囲で兵士達をねぎらってやりたい気持をおさえきれないでいる

2 隣組の組長から世話をたのまれた大切な客人達なのであまりぞんざいな対応をするわけにもゆかず、貴

重なあまい物でも食べさせて体面をつくろおうとやっきになっている

3 この土地には客人の年れいを問わずお茶とお菓子を出してもてなす習慣があるので、たとえ相手が年若

い兵隊であっても軽視せず一人前のおとなとしてあつかってやろうと意気こんでいる

- 4 少なからず縁ができた相手に対して無関心でいることはできず、ましてやかこくな運命を背負っている
若者のために少しでもできることをしてやりたいという気持でいっぱいになっている

問五

——部「けれどもこの餅つきも、人手が思うにまかせぬようになり、父親もまた世の中を気にして万事
自しゆく気味になり始めてから、簡素化された」とありますが、このころ「世の中」はどのような様子にな
っているのですか。

- 1 男性がみな戦争にかり出され、国全体に娯楽をつつしむ風潮がまん延している様子

- 2 男性は工場の仕事でいそがしく、各家庭でお正月の準備をするひまもない様子

- 3 戦争によって貧しい人が増え、ゆう福な家庭が肩身かたのせまい思いをせざるを得ない様子

- 4 機械化が進んで工場から人が減り、伝統行事を楽しむふん囲気が町から失われている様子

問六

□部にあてはまるものを選びなさい。

- 1 ふがいないのであった 2 あわれであった

- 3 いとおしいのであった 4 みじめであった

問七

——部「かく度に初めてのおどろきとよろこびを味わった。不安もまたその都度、新しかった」とありますが、このときの「ひさし」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 毎日間近に見る三頭の軍馬がいつもちがう目や動きをしていることにすっかりとりこになりながら、この三頭の馬もまもなく将校とともにいなくなってしまうことにいちまつのさびしさを感じている
- 2 くる日もくる日も三頭の馬をかけることに言いようのないしあわせを感じながら、絵に夢中になっている自分をみた父親が心配して画用紙をくれなくなってしまうのではないかと案じている
- 3 何度も自分に宿題の馬をかいてほしいとたのむ友達がいることにはこりを持つと同時に、いつか自分が代わりにかいていることが先生に見破られてしまうのではないかとこわくなっている
- 4 何回馬をかいてもあらためて馬の魅力を感じると同時に、自分の力では自分が見ているとおりの馬をどうしてもかき得ないこととも感じ、人間の力をこえた目に見えない何かにおそれを感じている

問八

——部とありますが、このときの「ひさし」の気持としてふさわしいものを二つ選びなさい。

- 1 馬に乗れないのは残念だが、格好いい将校達と連れ立って歩くのはそれなりに気分がいい
- 2 出発前の最後の思い出作りだというのに、親類でもない宿の子供をさそうのは不可解だ
- 3 目的地の神社は自分にはめずらしくもないうえに、馬で行くわけでもなくつまらない
- 4 世話になった将校達のために、戦地からの無事の帰還を自分もいっしょに祈願したい
- 5 将校達をひとりで神社に連れて行けるくらい自分も成長したのだと、親に認めてもらいたい
- 6 せっかく知り合った将校達がこの町で最後に外出するのだから、少しでも役に立ちたい

問九

——部「ひさしは、ついて歩くだけで上気した」とありますが、このときの「ひさし」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 将校達を敬う兵隊の動作の数々に接して、案内役ができる自分は皆みなから一目置かれる存在になったとさっ覚し、すっかり気をよくしている

2 間近にせまった戦いに備えて、きびきびとした動作で気を引きしめる将校達の様子に心をうばわれ、彼らの士気の高まりに自然と共鳴している

3 これまで知らなかった軍人達の規律正しい動きや、将校達の地位の高さを目の当たりにして、彼らのそばにすることに興奮している

4 自分の存在を気にもとめず歩を進める将校達のふるまいにちょっとした立ちを覚えつつも、彼らの威い厳ある行動に圧とうされている

問十

「部とありますが、このときの「ひさし」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 戦争に行く将校達にすこぶる明るく楽しい記おくをのこしてあげたいと願っている自分に気づき、おどろいている

2 いよいよ戦地におもむく将校達に不吉な未来を予感させる傷病兵や戦死者の墓地などを見せてはいけな
いと、内心必死になっている

3 将校達といっしょに歩いているとすれちがう兵隊達に敬礼されて気はずかしいので、境内に人が少なくて安心して
いる

4 川によく来る馬は見られずに、傷病兵や戦死者の墓地だけを見て帰るのは、将校達にとってもつまらない
だろうと残念に思っている

問十一

——部「ひさしは、将校達と、とりたてて言うほどの話をしたわけではないのに、三人に対する自分の気持ちが、出かけて行く時とははっきりちがっていることに気づいていた」とありますが、帰宅後の「ひさし」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 将校達にとってこの神社参拝は死ぬ覚悟をもって戦地におもむく最後の別れだったのだと意識され、ものの悲しい気分になり始めている

2 いつもよりも馬の話を聞かせてくれ、軍馬の画集まで買ってくれた将校達に好意をいただき、年がはなれていても友情が芽生えた気がしている

3 神社で頭を垂れて真けんに祈る将校達の姿を見て、恐ろしい戦争に真っ向からいどむ勇ましい彼らにあげられをいただき始めている

4 厳しい軍隊の規律に何も言わずひたすら従う将校達の姿にふれ、自分らしさをうばわれて生きなければならぬ彼らに深く同情している

問十二

——部「じっとしている馬は、今朝はかきたくなかった。毎朝、三人をむかえに来た三頭の軍馬を、思いきり走らせたかった。走らせずにはいられなかった。たてがみだけでなく、しっぽの先まで風になびかせた」とありますが、「ひさし」が「三頭の軍馬を、思いきり走らせたかった」のはなぜですか。

1 馬はからだでものを言うと言ったやせた将校のことを思い出し、しっぽの先で自分に別れを言っていた軍馬の姿を形に残しておきたかったから

2 三頭の軍馬に三人の将校を重ね合わせ、絵の中だけでも将校達を様々なしぼりから解放させ、自由に若い生命力あふれる姿にしてやりたかったから

3 画集まで買ってくれた将校達のやさしさを思い出し、三頭の軍馬のやく動する姿に将校達の戦地での活

やくと勝利への願いをこめたかったから

- 4 毎日軍馬を観察し続けた結果、これらの馬はじっとしている姿より走っている姿のほうが格好よく、将校達も絵を見て喜ぶだろうと思ったから

問十三

――部「自分がこれまで知らなかった新たな感情の世界に、いま、確かに一步入ったということを知らされた」とありますが、「自分がこれまで知らなかった新たな感情の世界」とはどのようなものですか。

- 1 人と人がどこかで知り合ってかけがえのない時間を共有したとしても、一人ひとりの本心など決して知り得ないという現実の前で、ぬぐえない孤独感と疎外感にさいなまれる空虚な世界

- 2 人は皆いつか必ず死ぬと決まっているなら、なぜこの世に生まれてくるのかという問いの前で、答えの見えぬいら立ちやむなしさ、底知れない不安や心細さにとつ然おそわれる予測不能な世界

- 3 定められた運命にあらがい、もがき苦しみ続けてでも、生きることへのしゅう着や未練をどうしても捨てることのできない人間のおろかさやあさましさ、みじめさなどが入り乱れる醜悪な世界

- 4 自分の望むと望まないとに関係なく、自分の命が投げ出され、それを無言で受け入れなければならないという計り知れない苦しみ悲しみ、どうにもできない無力感などがうず巻く理不尽な世界

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

思考をさまたげるのは知識です。

極論と思う人がいても、「知識こそ力だ」と大勢の人に説得されても、僕はかたくこう信じています。考えることと知識を得ることは相反しており、まったく別だと。

知識そのものが悪いというわけではありません。知識に考えのじゃまをされるといいう危険を、ゆめゆめ忘れてはならないということです。

考えることと知識があることは、水と油ほどちがいます。考えるとは、Aで何かを生み出すこと。一

方、知識とは、Bが生み出したものをせっせと集めてくることです。

情報収集をし、知識が豊富になっただけで「自分で考えた」と思ってはいけません。人の知識を借りているのに、「自分のアイデアである」とかんちがいするのは大きな過ちです。

「なぜ、なに、なんだろう」というのは思考のプロセスの出発点であり、思考の第一歩としては正しいのです。〈注1〉

しかし問題となるのは、思考の第二歩。問四この時点で情報を集めたがる人が、どうしてこんなにも多いのでしょうか？ 第二歩から調べものの道へとふみ出す人は多いけれど、その先はめい路につながっています。調べものの道は、考える道よりもずっと歩きやすいけれど、どれだけ早く歩けたところで、答えというゴールにはたどり着けません。問三

「なぜ、なに、なんだろう」と思ってGoogleなどのインターネットの検索エンジンを使ったら、たちまち答えらしきものが無数に出てきます。答えでなくあくまで「らしきもの」ですが、それを見つけて満足し、「知らないことはインターネットで調べればいい」と思ったとたん、手間ひまかけて考える必要がなくなります。

そうなると、どんどん自分で考えることをしなくなります。思考というぼう険の旅に出るはずが、第二歩をふ

み出したところで快適な場所を見つけ、くつろいでいるうちに一生を終えるようなものです。快適な「知識の小屋」にいれば、ぼう険で探し当てるはずの宝も居ながらにして手に入るので、幸運にも思えます。楽だし便利でしょう。

しかし、居ながらにして提供されたものは、自分で探し当てた宝ではありません。美しいかもしれませんが、本当に探していた宝かどうか、確かめるすべはありません。なぜなら、自分で旅をして手に入れたものではないのですから。

検さくエンジンに依存し、考えることなく答えを得るようになると、人間としての大切な機能が失われていく。僕にはそう思えます。これほど情報があふれている時代だからこそ、あえて情報をしゃ断することを、できる限り心がけています。知ることも難しいけれど、考えることはもっと面どうで難しい。こう覚悟したうえで、自分は考える人でありたいと願っているのです。

だから僕は、インターネットで検さくをしません。「一度もやったことがない」とは言えないけれど、いつやったのかがい出しせないぐらいです。

「アイデアを出しなさい」と言われたとき、要領よく自分以外の媒体をたよって見つけてくる。あるいは、その見つけたものを分せきしたものをそえて持ってくる。こんな仕事ぶりが自分のビジョンにつながっていったり、社会の評価を得ることは、あり得ない気がします。

仕事における経験が長くなれば長くなるほど、考えることは難しくなります。検さくしなくても知識が増えるためです。知識は時としてその人の力となり、知識は時としてその人のじゃまをします。

「そんなこと、もうわかってる。その話は、聞いたことがある」とフィルターごしに物事を見てしまう。考えるなどという面どうは省略して、要領よく答えを用意してしまう。もの慣れた手順をふんでしまうベテランは、どんな世界にもいます。しかし、何かを知っていることほど、悲しいことはない。僕はそう感じます。

いくら年をとっても、何も知らない自分を忘れずにいたい。いつも自分を、まっさらな状態にしておきたい。そう願っているから、僕は知識が増えすぎたと感じたらず捨てています。知ったことを忘れていくのです。最新のことも耳に入ってきますが、残さないようにしています。

どんどんどんどん捨てていく。むやみに知識をためていかない。

一見、時代と逆行するその先には、「感じる」と「考える」という手つかずの道が広がっています。

思考の第二步としては、そんな道へとふみ出したいものです。

問五

知らないことはすばらしい。最近あらためて感動したのは、『暮しの手帖』^{ちよう}の新入社員が書いた、初めての原こうを読んだときのことでした。編集者としての経験も知識もないから、自分の内側をさぐるしかない。自分の心と向き合って、答えを見つけるしかない。そんな彼女の文章は、技術的にはちせつですが、すなおで見事なものでした。どんなベテランもかなわない、思考の果てのかがやかしい発明がありました。

調べることをやめて、知らないことのすばらしさを思い出そうではありませんか。

(松浦弥太郎『考え方のコツ』)

〈注1〉物事を進める手順

〈注2〉インターネット上で目的の情報やウェブサイトを調べる機能

〈注3〉未来像。将来への見通しや計画

問一

部 a・b の言葉の文章中の意味としてふさわしいものをそれぞれ選びなさい。

a 居ながらにして

- 1 手を加えずひとりでに
- 2 たちまちのうちに
- 3 大した苦勞もしないで
- 4 その場を動かないで

b まっさらだ

- 1 何も入っておらず空っぽだ
- 2 態度がつつましやかだ
- 3 まったく新しい
- 4 心にわだかまりがない

問二

部 ア・イと同じ意味で用いられているものをそれぞれ選びなさい。

ア ゆめゆめ

- 1 ゆめゆめこの夏は毎日体をきたえなさい
- 2 ゆめゆめ今日読んだマンガはつまらない
- 3 ゆめゆめ毎日の授業の復習をおこたるな
- 4 ゆめゆめ少年時代の希望がかなってきた

イ あえて

- 1 Aさんの野球チームは強ごうチームの前にあえてやぶれ去ってしまった
- 2 Bさんは健康のためあえてエスカレーターを使わず階段をのぼった
- 3 Cさんの意見に賛成する人と反対する人はあえて同じくらいの数だった
- 4 Dさんはかさを持っていなかったのであえて夕立にぬれてしまった

問三

A

B

に入るふさわしい言葉をそれぞれ三字以内で書きなさい。

問四

部「問題となるのは、思考の第二步」とありますが、筆者はどのような点が問題だと考えているのですか。

- 1 思考の第二步で情報を集めることに走ると、答えを得たとかんちがいし、自分で考えなくなる点
- 2 思考の第二步ですぐにインターネット検さくをすると、不確かな情報を信用して行動してしまう点
- 3 思考の第二步で調べものの道へふみ出すと、なかなか答えが見つからず長時間調べ続けることになる点
- 4 思考の第二步で知識を増やそうとすると、自分が本当に知りたかったことが分からなくなってしまう点

問五

部「知らないことはすばらしい」と筆者が考えるのはなぜですか。文章中の言葉を用いて四十字以内で書きなさい。

問六

筆者が「考える」ことを大切にするために心がけていることを二つ書きなさい。

問七

次にあげるのはある家族の会話です。七十歳をこえた祖父は登山をしゅ味にしており、中学生の娘も祖父といっしょに山登りを楽しんできました。しかし、祖父の登山をめぐって家族の意見が分かれています。家族それぞれの意見をふまえて、後の問に答えなさい。

祖母

「おじいさんはもう七十歳をとくに過ぎて足腰も以前ほど強くないし、判断力もにぶっているでしょう。この間もうっかり道をまちがえて迷子^{まい}になりかけたそうじゃありませんか。もう登山はやめにしてもらいたいわ。」

祖父

「ワシは若い時から体をきたえているからそこらの老人よりずっと体力があるわい。それに、この間は道案内の書き方があいまいだったからちょっと道をまちがえただけじゃ。まだまだ心配なく山に登れるぞ。」

母

「私は山に登ったことがないからわからないけれど、山には危険がいっぱいあるみたいだし、最近はしきりにクマも出沒^{ぼつ}しているでしょう。遭難^{そうなん}事故^{じこ}にあつて人さまに迷わくをかけてからではおそいわ。」

父

「登山はおじいちゃんの生きがいみたいなものだし、本人がだいじょうぶだと言っているんだから、むやみに生きがいをうばうのもどうかと思うな。それに娘もおじいちゃんと山に行くのをとても楽しみにしているし、娘がいっしょならいいんじゃないか。」

〔問〕

あなたはこの祖父の孫だとします。あなたはこの家族の意見をまとめるために、どのような提案をしますか。娘の立場になって、どのようにまとめればよいか、理由を示しながら二百字以内で書きなさい。

〔三〕 次の各文について敬語の用い方の正しいものには○を、そうでないものには×を書きなさい。

- 1 私の写真展を拝見してくださいましたか
- 2 Aさんのことは昔からよく存じ上げております
- 3 どうぞ、そちらのソファールにおかけください
- 4 母は昨日Bさんのご自宅へおいでになりました
- 5 校長先生にこの書類をおわたししようと思います
- 6 先生が私の荷物をお運びしたのですか

〔四〕 次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

イサギヨクあやまる¹ 一代でザイを築く² 選挙でヒョウサが開いた³ 季節のスイイ⁴

花が水をスウ⁵ 音楽を奏でる⁶ ケンカの仲裁をする⁷ 春の兆し⁸

（問題は以上です。）

＊問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたりけずったりしたものもあります。

ここは余白です。

ここは余白です。

ここは余白です。

国語

番 号	
氏 名	

問十一	問六	問三	問二	問一①
			1	年生 問一②
問十二	問七		2	
			3	
問十三	問八		4	
			5	
		問四	6	
	問九			
		問五		
	問十			

[illegible]

1
2
3
4
5
6

5	1
う	く
6	2
でる	
7	3
8	4
し	